



Title	長崎医学の百年, 第六章 第五高等学校医学部, 第十二節 薬学科の設立
Author(s)	長崎大学医学部; 中西, 啓
Citation	長崎医学百年史, 1961, pp. 582-586
Issue Date	1961-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/6634">http://hdl.handle.net/10069/6634</a>
Right	Copyright(c) 1961 by Nagasaki University School of Medicine

This document is downloaded at: 2020-10-28T18:22:18Z

## 第十二節 薬学科の設立

従来、わが国における薬学教育は、殆どが医学教育の一部として行われて来た。それは薬品調合が医師の義務として実行されて居たため、薬学は幕末に至るまでその状態が続けられたのである。

先に記したように、フェイルケに学んだ新宮涼庭は、天保十年、京都で順正書院を設けて医学に序列を立てて教育したが、その課程中に、薬性、舎密、博物等があり、緒方洪庵、杉田成卿等と同じく、坪井信道に学んだ広瀬元恭が弘化四年に京都で開いた時習堂においても医学七科中に薬性（薬物）、窮理（物理学）、舎密（化学）の三科があった。

ポンペの渡来によって、系統的な近代式の医学教育が実施されるに至り、前述したような薬学の講義が原書に親しみ乍ら行われたのであるが、その投薬法、製法、用量等の講義は特に受講生の興味を唆り、後年の薬学発達

の基礎をなした。

その後、ボードウィンが教鞭を取っていた際、分析窮理所の設定をみ、慶応二年のハラタマの渡来によって理化学の教育が充実して来ると共に、フレゼニウス等の原書による実習も行われたのであったが、精得館が長崎府医学校と改称されてからも、薬学の講義は尚医学教育の一端をなすものであった。

明治二年、渡来したゲールツによって、漸く薬学教育の本格化並びに薬局方制定の端緒が開かれたが、これはわが国の薬学開発の道を開いたものと云える。

明治四年八月、大学東校では相良知安等の努力によりドイツ医学摂取の第一歩として来朝したミュルレル、ホフマン等が医学と併行して薬学を教授すべきことを進言し、翌五年十一月、ドイツ人ニーウェルト Niewerth が薬学専任教師として来朝し、製薬教場を開いたのであ

る。然しその講義は東校の薬局生に薬学初歩のみを講ずるに止まったので、学生は製薬学本科の設立を希望したのである。そして当時の医務課総裁相良知安に製薬学本科設立を要求したが、相良知安は

官は医学の基礎を定むるに汲々として、未だ薬学を顧みるの暇なし。足下等、宜しく志を変じて医学を修むべし。

と云ってその要求を退けて了った。

一方、京都府では、明治三年十二月、舎密局を設立し、前年、大阪舎密局において、ハラタマの助手を勤めた明石博高をその局長に任じ、ゲールツを教師として理化学並びに薬学を教授せしめ、薬品製造及び分析を行わしめていたのである。

ところで、分析究理所以来、次第に薬学教育の發達の萌芽を見守っていた当時の校長長与専齋は、明治四年十一月十二日、岩倉大使一行と共にアメリカ並びにヨーロッパ各国医学制度調査に赴き、翌々六年三月四日に帰国して間もない三月十八日、文部省医務課は医務局と改称され、長与専齋はその局長たる医務総裁に就任したので

ある。六月二十四日に至り、専齋は薬学が医学に並進すべき学問であるとして、製薬学校設立の要を文部省に建議した。それは

製薬学校設立の儀に付き伺

製薬学の一科、薬石の製煉、真贋の鑑別、輸出入の方法より毒殺の裁判に至る、皆之に関せざるはなし。故に文明列邦、殊に之を重んず。皇国寒暖適度、土壤沃饒、動植蕃殖、金石満溢、固より天府の邦国にして、薬石の如き十の八九は之を海外に待たずして足るべきと雖も、人民従来物理に暗く、之を製煉して、以て医薬に供することを知らず、唯漫然、海外に仰ぎ、薬舗の如き、固より薬石の製煉、真贋の鑑別を諳んぜざるに由り、輸入の医薬、徒に洋商の奸計に陥り、贗造品を販売して、一人之を知るものなし。今にして之が方略を設けずんば独り蒼生の生命を害するのみならず、他日邦家の費弊を醸すべき事、智者を待たざるも明なる所にして、其關係固より容易ならず、実に痛哭の至りに堪へず。之を以て今後当校に製薬学校を附屬し、毎年、各半期の初、青年製薬学生徒二十名を募り、期するに五年を以てし、初め三年間、之を医学校生徒に混じ、羅甸学、独逸学、数学、究理学、化学、動物学、植物学、鉱物学、薬方学を学ばしめ、次四年より全く医学生徒と相岐し、製薬学校に入れ、製薬化学、製薬学器械、用法学、実用化学、薬物分析学等を学ばしむる事二年間、

## 第十二節 薬学科の設置

五年の終り、大試業を行ひ、製薬家の称号を与へ、薬石の製煉、真贋の鑑別、輸入薬物の販売を司らしめば、天賦の薬石を製煉し、真贋の鑑別を知り、洋商の奸計に陥らず、数十年後、蒼生日々に寿域に躋り、邦家益々殷富なるに至るべき事、期して待つべし。蓋し、製薬家の須要なる事、斯の如くなるを以て、且夕、心を苦しめ、思を焦がし、更に之を外国教師に諮詢し、別冊製薬学校規則を録上す。仰ぎ願くは之を決裁し、速かに天下の府県に報告あらん事を。

明治六年六月二十四日

### 第一大学区 医学校

#### 製薬学校規則

第一 東京医学校中に製薬学校を置く

第二 製薬学校の生徒は其法則及び勤務、他の医学生徒に異ならず。即ち医学校規則第六章より第三十一章乃至第三十四章に遵ふべし

第三 入学年限を五年となす。五年の間に下条の学科を修めしむ。五年の終り、製薬学士の称号を与へし者は、後來、薬物買売規則に従て薬物の輸出輸入を司らしむ。

というのであるが、附記された教則はここでは省いて置く。この伺書によって説くところは、薬学の盛衰が、人命だけでなく、国家経済に大きな関係を持っていることであり、わが国における薬学教育の真髄を示しているの

であるが、その年の七月二十五日に至り、製薬学科設置の件が公布され、製薬学教室が誕生したのである。これは正に明治以後における薬学専門教育の先鞭をつけるものであるが、東京医学校（第一大学区医学校）の学則の發布された三月二十八日から約四ヶ月後のことで、製薬学科の課程は予科二年、本科三年であり、専齋の伺書における授講課目とは、相当の差異を加えた上で、開講された。このようにわが国の薬学教育は製薬者を作る目的で設立されたのが契機となつたのであるが、明治十年四月十二日、東京大学が成立してからも、医学部に附属したまま、製薬学科の名を留めている。

これより先、明治八年五月、東京医学校では速成を目的とする医学科三年、製薬学科二年の通学生制度が設けられ、十九年まで別科として存続したのであるが、この間、明治十五年七月十八日、文部省は薬学校通則を各府県に通達した。これは医学校通則の公布より約一ヶ月半遅れたものである。薬学校通則は医学校通則と同じく、甲乙二種に分ち、甲種は「尋常の薬学科を教授し、以て

薬剤師の具成を「図」り、教員中、少くとも二名は東京大学卒業とし、生徒は十八才以上にして初等中学校卒業程度の学力を有する者につき、和漢文、算術、地理、物理学の学力試験を行って入学せしめ、教授科目は物理学、化学、動物学、植物学、金石学、薬用植物学、分析化学、薬品学、製薬学、毒物学、薬物試験法、調剤学、外国語であり、修業年限は三年であった。乙種は「簡易の薬学科を教授し、以て薬剤師の速成を「図」り、教員中、少くとも一名は東京大学卒業とし、生徒は十六才以上で、小・中等科卒業程度の学力を有する者につき、読書、算術の学力試験を行って入学せしめ、教授科目は物理学、化学、植物学、薬品学、製薬学、薬物試験法、調剤学で、修業年限は二年であった。この薬学校は薬剤師(薬舗主)教育を目的としたものであるが、薬剤師の業権たる処方箋による調剤は、当分医師の兼業となっていたので、薬剤師試験を受ける者少く、就学者も甚だ少かった。然し、そのうち、追々、将来を慮って薬学を希望する者も多少でて来たので、これを目的として次第に各地に薬学校が

## 第六章 第五高等学校医学部

設立されるようになった。ところが明治七年八月十八日、文部省が公布した医制以来、薬舗主という調剤専門家を作り、同時に医師の調剤を禁ずる建前であったにも拘らず、新教育を受けた薬剤師を俄かに養成することも出来なかつたので、第四十一条の第一項に「当分二等医師は願により薬舗開業の仮免状を受け、調剤を許す」と規定して、医師の調剤に対する除外例が設けられ、久しく医薬分業問題として論議を繰返すこととなつたのである。

さて、薬学の進歩は徐々に進歩しては行つたが、明治二十二年三月二十二日、文部省は各地の高等学校医学部に薬学科を併置することを決定し、翌二十三年三月には文部省令第四号を以てこれを実現しようとした。これは明治十五年の薬学校通則中、甲種薬学校に当るものであった。そして、明治二十三年六月十八日、文部省令第七号を以て、千葉・仙台・岡山・金沢・長崎の各高等学校医学部に「薬学科」を併置して、この甲種薬学校を設立したのであるが、長崎の医学部では、生徒の定員四百人を五百人と改正され、ここに第五高等学校医学部

## 第十二節 薬学科の設立

薬学科が誕生したのである。教授としては明治二十三年始めて帝国大学を卒業した薬学士池口慶三が招かれた。

そして明治二十三年九月には医学部で最初の薬学科入学試験を施行し、同月二十九日に第三回医学部入学生と共に、第一回薬学科入学試験合格者十六名の入学を許可したのである。